

1923年 (大正12年) [19歳]

「辰雄日誌 1923」No. 3 (2)

— 1923年10月1日～31日 —

小池辰雄

○1923年10月1日 (月)

晴。十月が来た。最も好きな月が来た。大天災の起った日から正に一ヶ月を経過した。月が変わると心も落ちつく様である。安寧の日の東京市に臨むことを祈る。一切の僕の罪を神に告白して、全然、御聖旨に委ねて安らかに活動の日を俟ち望まん。一日一日を主によりて確かりと。

○1923年10月2日 (火)

晴後雨。朝、パン1片、玉子2個、スープ半碗。昼、パン2片、お豆腐半帳、ジャガイモ少量。午後3時半頃、下痢。夕、スープ、重湯少量。苦しみを更に。有難きこと。己れの弱きを知る。

○1923年10月3日 (水)

晴。秋のよい気候で病臥しているには本当に楽で幸である。

朝、スープ、重湯、カステラ半片。昼、お粥2杯、卵、お芋少量、カステラ半片。夕、お粥1杯、茶碗蒸、スープ。今日は痛みなく嬉しい。三弦さんが診察に来て下さった。夕飯は、母上、三弦さん、姉上、壽子さんと五人で戴いた。

リンカーンの伝を繙いて、平民的な彼、正直な彼に私淑せざるを得ない。「人」なる彼、「人格者」なる彼が僕のなりたい人である。

武田の叔母様から御葉書を戴いた。その一節に左のことがあった。

「今朝明け方にめずらしく政美兄様の夢を見ました。その時、兄様が私に辰雄の病気はもう全快します、そして前より丈夫になりますと、にこにことして語られ、私も大層安神をしたら目がさめました」

と。何と有難き御報せではないか。叔母様の御心に感泣せざるを得なかった。兄は叔母様のためにも、僕のためにも祈りて居られる。僕はどこまでも人のためになる人間になりたい。一身は人のために神に捧げて最も幸福なのである。叔母様の喜び、母上の喜び、ママ様の喜ばれる辰雄になりたいのである。

詩人ローエルが一篇の挽歌こそ僕の野心を歌うものであろう。リンカーンはこの歌を勝ち得た人である。実行の人である。実のある人である。

ああ如何に美わしきよ、君が生涯は、



人類の牧者として神に捧げたり、

君が友愛、正義の精神は、万世を貫きて栄えん。

君が灑^{そそ}ぎし血潮こそ、自由の国土生まるなれ。

○1923年10月4日 (木)

晴、雨。朝、お粥、卵。昼、馬鈴薯少量、お粥。夕、お粥、茶碗蒸。枕頭に本立て二つで屏風が出来ている。書籍が何よりの良友である。独逸語の勉強は愉快である。

○1923年10月5日 (金)

雨やや寒し。朝、お粥1膳半、卵、鯛味噌、梅干。昼、馬鈴薯1個半(潰してバターを混ぜていためたもの)、これが実に美味しい。晩、茶碗蒸(ウドンをとじたもの)、お粥。今日は食量も増して精力少々回復した。

○1923年10月6日 (土)

秋霖。未だ床は終日敷いたままである。少々長引いた。しかし、あせらぬがよい。万事はお任せして善である。痩せたことは随分痩せた。20才という生々澁刺たるこの時、争で屈することあらんやである。起たんときは必ず来る。働くときは前途に洋々と横たわっている。活動の前の一休息であると思うと有難い。足にも手にも力がない。ふらふらすることがよくある。独逸語の独習は面白い。今日も少し進んだ。頭が疲れるから気の向くに任せて、色々な書を読んでいる。

今朝は、ねっとりしたお粥1膳半、馬鈴薯のお汁。お昼は同2膳、豆腐のあんかけ。晩、同3膳、シチュー2杯。それに3時の間食、カステラ半片、牛乳半合。仲々の食欲。尿量も増加。母上も喜んで下さった。今度は、躓くことなく順調に癒りたいものである。また癒ると確信している。今月に半になろうがかまわない。その時来らば深く深く神に感謝し奉り、一大決心のもとに我が活動の生活に入ろう。

○1923年10月7日 (日)

曇。熟睡の出来ないのは困ったことである。無想でいることが出来ないらしい。随分、濃厚な夢を見る。そのために、目覚めることがよくある。夢でない様に明瞭^{はつき}りしている。神経衰弱の徴かも知れない。神経衰弱症にはどうも成りたくないものである。身体の不健康の及ぼす諸影響の大なるをしみじみ感じた。今日は、お腹は余程よい様である。天候が本復せず病人にはこれさえも影響する。



○1923年10月8日 (月)

雨、曇。相変わらずの天候である。朝、お粥、卵、馬鈴薯。昼、お粥、馬鈴薯、魚。晩、お粥、薩摩汁、殊に馬鈴薯が美味しい。独逸語の勉強は愉快である。しかし少ししか出来ない。身体の衰弱甚だしいので立ち居が億劫^{おっくう}である。入浴した。母上に洗って戴いた。垢がぼろぼろと出た。

○1923年10月9日 (火)

曇天。朝、お粥1.5、卵。昼、お粥2、豆、馬鈴薯、カステラ。晩、お粥1.5、薩摩汁。便の検査の結果、虫の卵が居るとのこと。余り心地よくない。

夕方、三弦さんが来られた。虫くだしの薬とひまし油を持って来られた。明後日、ひまし油をかけるとのこと。水戸へ行く日は何日になるかわからない。とにかく今月の20日までに帰ればよい。2学期は学校へ帰ってから大分へビラねばならない。勇気を出して元気に愉快に暮らして行こう。何も無駄な心配をせぬに限る。健康体を戴いて愉快に暮らして総てを神の御手に任せて歩むのが最も幸福である。他人を喜ばせることが最も己れを愉快にすることである。母上を、叔母上を。この頃、気候不順で随分寒い。

○1923年10月10日 (水)

曇後雨。この日記を書き始めてから1ヶ年になる。身体は一進一退で今日未だ確^{しつ}かりしない。今は東京に養生中である。何たる事であろう。総ては自分の肉の慾より生じたものである。肉につくものは滅ぶ。この大真理を悟らしめて下さった。感謝の1年であった。

しかし、未だに肉を離れざるこの身を顧みるときに悲嘆に暮れざるを得ないのである。然れども決して遅からずである。神を呼び求むること赤兒の乳を求むる如くなれば、我この醜態兒、病弱兒も何時か起つときがあると信ずる。神の力を授け給う日をぞ待つ。

○1923年10月11日 (木)

晴。珍しくも晴れた。神楽坂まで母上、姉上と共に散歩に行つて来た。午前、リチネ〔ひまし油、下剤〕を飲んだ。3時間ほど気持が悪かった。2時半頃、下痢した。泰ちゃんが見舞に来了。帰りを送つて北町まで行つた。夕食後、斎藤様へ遊びに行つた。入浴して就寝、その後3回の下痢があった。

○1923年10月12日 (金)

曇。天候はまた思わしくない。肉を離れて霊に。然らずんば死なり。霊につかば生命なり。求めよ神を。

夕方になり、空晴れ渡り、僕の好きな好きな星が淨き淨き姿をキラキラと現わした。お



湯屋に行った。鏡に映る自身の姿の如何にも貧弱なのに我れながら驚いた。しかし悲嘆の一面のみをそこに見るのではなかった。僕の眼光、顔色は希望に満ちていた。生命の源はこの眼にある。この眼底の決心こそ我が身体の原動力の存するところである。

Mens sana in corpore sano. [健全な精神は健全な身体の中に]

いぎ鍛えん身体を、強健なる身体を。僕の身体は冬枯のどん底にある。体重計は示してくれた、「6貫5百匁」[約35.6kg]と。誠に大なる希望を抱いてこの9貫5百匁の土台の上に堅実に築き上げん。

若き我、希望多き我に、聖霊宿り給え、御力を授け給え。——入浴後直ちに——

○1923年10月13日 (土)

晴。起床7時半。晴れた朝は実に好い気持である。気候はしまつて来た。秋冷とでも云うのか。午後、母上、姉上と神楽坂の方へ散歩に行った。3時のお茶のとき、薩摩芋と里芋と馬鈴薯とを戴いた。何れも、フカシタテのほやほやで美味この上なしであった。天然の味には言うに言われぬところがある。

包丁を研いでいて少し落ちつきが足りなくて、左の中指を切った。潮時らしくなかなか血が止まらなかった。沃度ホルム膏〔ゆびぐすり〕の利目ききめのお陰で癒る様である。夕方、入浴した。

宇都宮の兄から御手紙を戴いた。僕の病気を心配して居られる。誠に済まない次第である。幾重にも謝するのである。しかし願わくはお赦しを乞う。僕も左程のこしぬけ男兒ではない覚悟である。

若者よ、雄々しく立て、その痩せた骨皮の身体でいいから起て、そうすれば汝を必ず助けてやる。と我が神様は仰っしゃるのである。父なる神は助け給うのである。喜び勇むべきである。

逝きし兄上様、守り給えかし。その遺されし許多の書籍は僕を励ます力である。本箱は厳然として立つ。学べ！学べ！と言っている。嘗て兄上の眼光の徹せしその書籍の前に跪き、その教を仰ぐ。学ばん！学ばん！と答えざるを得なくなった。一書「Little Lord Fauntleroy」[「小公子」]を開いて見た。そこに懐かしきペンの跡があつた。涙ぐまざるを得なかった。そうしてまた読まんと思った。

To Tatsuo-san,

With herty joy and hope.

On my first Christmas, 1918.

Your brother Masami

兄の「心からの歓びと望み」それはまた僕のためにも捧げられるべきものである。兄上よ、僕は未だ兄上の歓び給う人間とならざるを悲しみます。どうか、もつともつとい



つまでも僕のために父様に祈って下さい。きつと僕も兄のあとを見ましよう。両兄のよろこぶ、母上の喜び給う辰雄となりたいものです。

厚き祈りを、今晚9時に兄上(天の)と共に。

○1923年10月14日(日)

曇。起床7時半。毎朝、卵を一つ宛戴いている。お昼は、好きな薩摩芋と鰯^{あじ}とを戴いた。午後2時半頃、四郎君が突然見舞に来られた。今日は彼の誕生日であるのだ。それも一つの理由で今度上京されたのだ。親切な心は受けて心地よく、与えて更によきものである。山本の姉上が仙台の梨と中野の栗とを持って来て下さった。わざわざ忙しい中を重いものを御持参、有難かった。夕飯を上げようと思っても忙しいからと云ってすぐ帰られる。三人の子供の主婦、女中がないのだからその務は重大である。

「神の聖旨に従うことに於て基督の如く」の章を読んで、新しき生命の泉が流れ込んだ心地して嬉しくあつた。嬉しさの最も清きものは此の如きものであらう。母上と讃美歌を歌う。「目醒めよ吾が霊……」は本当に「目醒めしめられる」のである。

身体は健康へ健康へと進みつつある。感謝感謝である。病苦を味わせられては一段と聖旨の探り得られるように思う。健康体を戴いたらば更にその聖旨を深く考えて我が道を歩まねばならない。

○1923年10月15日(月)

晴。昨晩は久しぶりで美味しいキャベツ巻を戴いた。入浴してすぐ就床したので心地よく寝られた。寒くなかった。朝は時候が相当しまつていて冷つとする。朝食はパンと韮のお汁(是が唯一の僕の嫌いなものであつたが)。今朝食べて見るとそんなにまずくない。ただあとまで臭いが残るのが少し嫌であるが。しかし有難いことに、僕はこれで嫌いなものは一つもなくなった。何でも来いである。総てのものは戴けるようになった。食物に好き嫌いの多かつた幼児の僕は全然、好き嫌いのない今日の僕となった。有難いこととて、また驚くべき変化とて一寸ない位である様に思う。それを人が喜んでくれてか、神のお讃めか、今日は僕の好きなものが沢山あつた。曰く、「お餅」(之は昨日、斎藤さんから戴いた)、安倍川餅、醤油餅にして食べた。「栗」(之は昨日、姉さんから)、燂^ゆでて、また甘くにて。「梨」(之も姉さんから昨日)、仙台の長次郎の梨、素敵にうまい。それから晩は、好きな薩摩汁(ごつた汁)その中のお餅といい、肉といい、玉葱といい、ジャガ芋といい、大根といい、その味は珍無類である。渾然として美味を生ずである。

今日は午後2時頃、藤井先生がわざわざ来られた。恐縮であつた。藤井先生には初めてお目に懸かるのであつた。好い先生と云うよりほかに無い。色々とお話を承つて有益であつた。丁度、兄上の本箱を整理中であつて、チラカッテいるところへお通ししたのは「心ならず」



の所為^{しわざ}であつた。

信賴に依る其の日暮らし。基督者の生活はこれでこそ本当であるのである。その意味がよく解つて嬉しく覺えた。先生の著書、『永遠の希望』にもこの意があるが。先生から直接にこのことを窺^{うかが}つてその印象は実に深く、この有難き主義の心に深く刻まれたことは今日の最大の獲得物であつた。先生の御経験のお話もまた有益なものであつた。先生の奥様の「御召しを蒙^{こうむ}つた」そのことに就いてのこと。今回の大震災に關してのお考え。これは正に僕の考えと符号していた。それを伺つて、僕は嬉しくてたまらなかつた。先生も然^{しか}（爾か）思つて居られる。内村先生も恐らく然らんとする。神より戴く確信というものは恐るべき力のあるものである。一致のあるものである。

災いは、社会国家には罰として臨んだ。個人に於て災いは来るほどその人を深刻なる幸福に導く。深刻なる幸福、これは僕の言であるが、即ち現世の幸福と正反對な幸福を意味するのである。現世の幸福は皮相の幸福、浅薄な幸福、偽の幸福、泡の幸福、空の幸福、虚の幸福である。故に、多くの「現世の人」（永遠の生命を思わざるの人）は我々の眞^{まこと}の幸福を災いとなすのである。不幸となすのである。そこに、人と人（基督者）との考えに霄壤^{しょうじやう}も^{ただ}啻^{ただ}ならざる差が生ずるのである。

先生の言われる如く、立派な基督者は No Exception 「例外なし」に迫害、困難、煩悶に遭遇してそれを通して人である。聖旨の信賴に一身を捧げた人である。……………

これを思ひかれば思ひすると、基督教の深遠と有難みとがしみじみと感ぜられて、この心の状態に生活することの幸福がつくづく感ぜられるのである。

横浜の某ミッションスクール校長ミス某氏はこの震災のとき、校舎が倒れ自分がその下敷きとなつた際、神の有難きお召しとして讚美歌を高唱して感謝に満ちて御許に召されたとのことである。実に立派な死である。生徒は讚美歌に驚いて救いに行つたそうであるが、ぐずぐずしているとあなた方も火に焼かれる、と言つて自分の生命は主の御聖旨となし、人をして無理な救援をなさしめなかつたとのことである。涙の零れる話である。

人生の幸、不幸はこの心の有無にあると云つてよい。人は真面目になり、謙遜になり、己れの小にして弱きを知るときに、神を見ざるを得なくなるものである。そしてこれが本當の真理なのである。人の考えのみではどうしても小にして浅薄なものである。人智は如何に発達し行くも遂にそれのみでは空虚である。そこにすでに驕りという根が生えているからである。根絶しない以上だめである。

先生のお話をうかがうとどうしてもこんな確信がある様に思われる。僕の心には勃々として抑えがたく湧いて来た。先生の言われることは然り！然り！であつた。経験がそこまですぐなくとも、疑いが先生の言われることに起こらなかつた。そして、そういう経験、そういう心持を有ちたいと思うことは勿論随分あつた。

祈りの一大重要事であることのお話は有益であつた。亡兄の遺稿の出版に關して有難き



報せを今日承ったのである。来春出版の御予定で居られるとのことである。先生は一切を引き受けて下さった。僕は印刷物の校正に出来るだけ尽力するつもりである。

御多忙中また、御眼のお悪いところを此くまで我が子のことの如く愛して下さるのは感謝の至りである。弟たる僕は尽くさざるべからず、努めざるべからずである。4時過ぎ頃までお話し下さった。

今日は姉上、病後最初の出勤をなされた。相当に疲れた様である。今後、滞ることなく順調に行くことを切に祈り奉る。僕の起つときも来た。急がずに而も休まずに、しっかりと之を旗印に。——夜11時——感謝なる一日。

○1923年10月16日 (火)

晴。起床7時半。朝食、卵、パン等。午前10時、母上を御伴れして武田の叔母様を御見舞いに行く。好い天気である。電車通りは歩いて不快であるが人通りの少ない所は気持がよい。武田まで歩く位は、母上とでも丁度よい散歩である。叔母様は非常なおよろこびであった。淋しき御心のわかる、母と僕にはその嬉しさがよく受けとれて、こちらも一層嬉しく感じた。12時頃、ちよつと散歩に出て、製菓会社でビスケットを買つて来た。叔母様には、カステラを戴いた御礼として僕が家を出るとき姉さんから戴いた大事な栗と梨とを携えて上った。僕の心を汲んで戴くのであった。一時、三人で食事を戴いた。ウドンのお露とまずは美味しかった。殊に御飯が美味しい。

食後、大人の話の仲間にも入れず、また独り散歩に出かけた。叔父様は家の庭や中の手入れで相変わらずであった。それが楽しみの最大、己れの仕事の最重なものとならざらんことを祈る。住居を心地好くすることに細心となる、それではお終いである。飲食の類である。他は言うまい。ただ、品性の低くなり行かぬ様、祈るのみである。お暇して来たのは5時近くであった。

叔母様を幾分なりともお慰めし得て二人とも満足であった。母と叔母との間には涙が交わされていた。

一事ある。それは基督教の深遠、神に信賴し奉る生活の幸福さ。そのまた如何に真理にして、人の人たる所以なることを示されたことこれであった。叔母様のために祈る。基督教よ、基督教よ、神なり、神なり、と。叔母様の受けらるる苦しみ、それは不当の苦しみであるでしょう。そしてその苦しみこそ貴き苦しみでありましょう。夫の薄情を受けられよ。而して心はおだやかに深く、切に神に之を向けられよ。神は示し給うらん、希望ある慰安の光を。しかはあれ、叔母様の痔疾の治療法の定まらざるは御病人にとって何よりお困りのことである。その法の定まらんことを望む。兄上を夢みられた叔母様の夢は正夢であった。僕に確信があった。神は示し給うた。叔母様も信じた。

而して果然、僕の病は癒された。叔母様の喜んで下さったのも一通りでなかった。神の



命じ給う日に雄々しく水戸へ旅だたん。叔母様の病の軽快し趣かれるときは、遠からぬ中にあると信ずる。僕の用の益々多きときに。

晩、空腹で帰つて来た。コロッケの御馳走、案外の不出来にムカツとしたのは悪かった。あとで謝った。しかし頭の無い人は、可愛そうだと思った。何度注意してもわからない様である。しかし彼の女の清き天真の心をそのために傷つけたくない。これはどこまでも尊重しなければならぬ。かえつて僕等の学ぶとすなのである。

それから、斎藤様へ母と一寸遊びに行った。一家の和合は相変わらずで、レン子様は愛嬌たつぷり、無邪気なものである。斎藤様に肩馬カタクリンマをさせるなど、親子も遊ぶときは友達のように如くである。而もそこに無礼のない処、躰け方の好模範である。蓄音機と云つて、飯台や椅子のしたに潜り込んで、座布団や布で蔽つて、その中で唱歌を歌う。斎藤さんは、ギーギーと云つて、螺子ねじを巻く真似をされる。笑い興じて1時間余りを過ごした。

軍艦の画をレン子さんに書いて居られた。軍艦の画とは中学時代によく書いたものだと言われたが、それを拝見するとその筆跡は、一朝一夕の業のなし得るところでない様である。感心した。世の事務に忙しくてもこれ書き得る器用さの余裕はありたいものである。

帰宅後、入浴に行った。体重は次第に増す様であるが、まだまだ骨皮筋衛門である。氣にする必要は、しかし無い。雲が片々として浮いていた。明日の天気を祈りつつ。

○1923年10月17日 (水)

快晴。新嘗祭。午前9時50分、母上と家を出る。快晴の好天気、氣もはれやかに足も軽い。市ヶ谷から省線電車に乗った。中野駅に着いたのは11時20分前。この辺に来るともう氣が生々する。母上も喜んで居られた。姉さんへのお土産を買つて行く。それから三人の子供のも。6、7町を散歩歩きで行くと田畠の開けたところへ出る。家は生垣でめぐらしたのが多く、コスモスの赤白で垣の出来ているのは如何にものんびりして田舎氣分のする好いものである。薄すすきやぐらが櫓に達する程よく成長している。芝が青々としている。

山本の兄姉の新しい家を見るも心地よい。祭日で兄は植木に余念なく庭働きであつた。突然の訪問に驚いて居られた。南に面して門がある。門の前は原である。門から家までの南側が庭になっている。東は畠である。西は横田という家と隣り合わせである。北は少し隔たつて人家がある。周囲がゆつたりした、のんびりした純田舎風の住宅で本当に羨ましくなった。地震で壁はやられていたが、その他は僕の眼に間然するところがない。殊にその日当たりのよいこと、風通しのよいことは、すっかり氣に入ってしまった。多く硝子戸で繞らされている。朝は日の出のときから日光に浴し、夕は春うすづつきうすづつのときまでその恩沢を蒙る。その陽気さは稀に見るところである。この間の十五夜のときの月がよかったことを姉さんは話されたが、全く然らんと思われて嬉しかった。畠のかなたから地上にぽつこりと浮き上がってくるところは何としてもお昔噺の国の夢の如くだろう。西は松の森へ笑が如くか



くれ行くことだろう。とにかく気に入って、僕は激称して已まなかった。

義雄さん、隆さん、富美ちゃん等を育てる場所として、また格好の地である。野や畠や小川と親しんで育ち行く幸福さ。都会の兒に優ること幾千倍。バッタを取りに連れて行った。大きなのを一匹得て帰って来た。大喜びで半時間位は我を忘れてバッタと遊ぶ。バッタがすこし弱ってきたから、

「可愛そうだから遁がしておやり」

と云うと、不思議にも皆喜んで放した。生きものは殺すものでないことがわかった様で嬉しかった。

富美ちゃんには、その肖像画をやったら、つくづくながめてはキャツキャツ云って喜んでた。富美ちゃん、おばあさんに馴ついてよく抱いていた。

お昼はヒラメの御馳走に好きな浅漬であった。ヒラメは今東京の市中にないもの。はからずも珍品を供せられた。姉さんは僕が昨日来ると思って、栗ギントンにオムレツをして待っていて下さったとのこと、お気の毒であった。午後から散歩やお手伝やらで之またのどかな野情を味わい、夕食をどうしても辞し兼ねて御馳走になった。栗金豆に、秋魚、この二品これまた大好物。実に美味しかった。母も姉さんのお手ぎわに感心して居られた。姉さんの心尽くしであるから、その味は格別であった。

今度は、宿って行け宿って行けと止められたが、母は、宿りたいことは宿りたいのだけれども、病気の姉を家に残して宿るは少々道に非ずとのお腹で、これは已むを得ずお断りして帰って来た。

明月が中天に懸かっていた。母上もそれを見られた。僕はそれだけでも非常に嬉しかった。秋の玲瓏たる月の姿を仰ぎ得る、母の心の向くところの一なるが如く、見るものもその天体と一つ、何と清きことではないか。母上の眼は俗人の万象を見て誘われ迷う眼とは全然違う。此く思つて我と我が心をなぐさめる。月の夜、静かな中野の道を歩む母と我。幸なる哉、母上をお喜ばせるためには何でも思つた。

今日の散歩、母上喜ばれて何よりであった。帰って来たのは8時近くであった。斎藤様のレン子さんからの贈物が筆筒の上にあった。それは昨日、斎藤様がレン子さんの手帳に書かれた軍艦の画をはぎとつたものであった。昨日一寸、

「レン子さん、これ戴いて行つて宜しい？」

と聞いたその言を快くうけられたのであろう。記念にこれを日記帳に張るのである。入浴、心地よく就寝。〔海に三隻の軍艦が浮かんでいるスケッチの貼付あり〕

○1923年10月18日 (木)

快晴。朝のひきしまった気は、もう少し体がしっかりして来ると丁度よいことだろう。今は少々寒く感ずる。身体を本位として、忍耐力ある抵抗力ある強健な身体を作るべく最善

の努力、鍛練、節制をせざるべからずである。午前は本を見ている中に過ぎた。

朝、オハギを一つ戴いた。胃腸はよくなったから、これを更に更に強くしなければならない。それには何と云っても節制、ただこの二字あるのみである。間食は進められてもしたくなくなった。それよりも三度の御飯を美味しく戴くべきである。美味しそうなお菓子が眼を唆^{そそのか}すときあるときは、一寸心に問うてみるがよい。そうすると眼と頭の欲で食べたいのが八分を占めていることがわかる。その胃腸に害をなすことは明瞭な事実である。栄養のたしにならぬと思えば、口に入れぬに如かずである。不規則は胃腸に禁物である。

神楽坂まで散歩して本屋をのぞいて来た。買いたい本はあったが高すぎるのと、学校のことを思うとそれだけの余裕のないのを知って買えなくなる。母上をお伴れして武田の叔母様を御見舞いに行く。快晴で歩いているとポカポカとほてつてきて上衣を脱ぎたい位である。30分ばかり居て、僕は目白なる白井様まで本(受験の)を貸して上げに行った。なかなか暑かった。西島様へ行ったら、家の中はランドで例の爺やが居た。始め、何処に居るか見当が着かなかった。よくよくその声の出所を窺うと屋根の上ですましたもんである。瓦の並べ換えをやっている。数語を交わして、水で口を潤して帰って来た。目白駅から電車は相当な混みであつた。

それから山本へ行くことにして新宿で乗り換えて中野行に乗る。非常な混雑で老人小児は気の毒である。名状し難き混雑である。中野駅に下車したのは4時半であつた。今日は田蒲道へ出た。畦の上に寝ころんで、暫し、秋晴れの空を茫然と眺めて精力の回復をはかった。実に好い気持であつた。歩きに歩いた足のほても癒えて、立つのがいやになる位いい気持になった。夕日が微弱なるしかし心地よき光を投げていた。蟋蟀^{こおろぎ}が鳴き始めた。豆腐売りの笛(ラッパ)の音が方々で響いている。夕暮れの訪れ来たのを知らせる。

小高い岡を西に上つて、山本の姉さんのお家へ行く。台所から「こんにちは」と云ったら姉さんは驚いた顔をされたが、すぐ快く迎えて下さった。小憩後、お風呂屋へ行つた。疲れた足、何とも云えない快さ。田舎にしては上々の設備であつて、気持がよい。返つて市内の普通のよりも奇麗である。本当に「ああ、いいきもち」と云うよりほかなかった。その足をゆるやかに運ばせれば、星は現われ来たり、月は冴え行く宵の口である。虫の音と、四囲の涼しき景、コスモスが月光に銀色を帯びて、そろそろ清き水を葉に持たせる。夜気が下りはじめたのだ。そしてまた、お心尽くしのお汁粉とコロツケー、何とも云えない。あまり勿体なすぎる。美味しく美味しく戴いた。

隆さんが胃腸を害している。可愛そうである。言がよく通じないから更に気の毒である。姉さんのもつと注意してやらんことを望む。こじらせない中に徹底して治療した方がよい。山本の家では、よくよくの場合でない限り、お粥を食べさせないとのこと。少々無茶と思う。姉さんは子供の育て方が上手でない様だ。もう少し考えて戴きたい。追々、お話ししたいと思う。



今日、讚美歌集を差し上げることをお約束して来た。歌でも歌う気になれば、姉さんの心も更に和らぐことと思う。子供をおだやかに育ててほしい。今の様では、子供はイジケル。がみがみ叱ったり、叩いたりするのはよろしくない。8時、お暇して来た。

何と美しい夜であろう。涼しい晩である。中野駅で切符を買い、改札口をプラットホームへ出たとき、構内へスベリ込んだ電車がある。吐き出された人の先頭に山本の兄が居られた。邂逅にそこで10分ほどの談話を交えて急いで、来た電車に乗った。窓外から吹き込んだ風は何とも云えない好い気持である。いつまでも乗って居たい気がした。山の手線は速い。すぐ市ヶ谷は来た。帰宅して入浴。心地よく就寝した。

○1923年10月19日 (金)

快晴。楽しかりし一日。起床7時半。戸を排すと暖かい光、輝きの空が僕を待っていてくれた。病中から母上と楽しみにして其の日を待っていた其の日が遂に到来した。母上も僕も子供の様に雀躍した。母上を、御不自由な母上を慰め奉らん日が来たのであった。僕の願望の満たされるべき一日が来たのであった。

お弁当を作らねばならぬ。お茶屋で食するよりもお弁当である。北町のアメリカンベーカーリーへ行って黒パン半片を求めた。13銭である。八百屋でキウリ(生瓜)を1本買った、5銭である。生瓜のサンドイッチが出来た。18銭のお弁当である。それにお握りを五ツ。これが母上と僕の昼食である。それに牛乳を1本。家を出掛けたのは10時40分。僕は洋服、母上は杖の代り、日よけ兼用の傘を1本携え、お弁当の袋一つを互いにさげて、手を繋いで。空は心ゆくばかり晴れ渡っている。小春日和！市電で新宿駅まで行く。中村屋でカケガラスを二つ買った。ちよつと気まりが悪くあつたが。お腹に丁度好いだけなのだから仕方がない。林檎を2個、これで母上の袋も満腹した。京王電車に乗った。乗って考えた、何処まで行こうかと。玉川まで行こうか、それとも神田上水の土手へ出るため代田橋下車しようか。玉川は玉川電車の終点の辺なら面白いが、この京王電車の玉川は面白くないと思い、土手は右へ行くことにした。代田橋で下車、その辺の景を母上に説明して上げた。母上は大層満足気で居られた。頭の軽くなることは事実である。郊外気分、田舎情趣、秋の郊外の何と心地よきことよ。去年よく散歩に来たときのこととも思い出された。去年は17日に水戸へ帰った。

上水第16号橋へ出たのは、かれこれ12時になろうというときであつた。来て見てがっかりしたのは水量の大減であつた。折角と思つて来たのに涸れんとしている水、これでは興も頓にさめてしまったので上水に沿って散歩することを已めて、外へ行くことにした。

ただ当てもなく進路を西北へ摂った。母上と段々考えてみると、中野へ出られそうに思われたので、これは面白いと。足は、返って進むのであつた。西北へ西北へと、ただ方向を定めて道を知らざる僕が、見えざる母上をお伴れして歩み行くのであつた。竹林、薄^{ススキ}の野、



栗林、松林と小路を縫って行くのは本当に何とも云えない涼しいものである。

その内に社の鎮座せる森へ出た。森の前には小川が流れて居た。目高が涼しげに泳いでいた。何と云っても秋である。大根畠の美しさ、生々たる緑の鮮やかさ。純白なる根が所々に頭を抬げている。社で小憩した。人は母と僕だけ、森閑たるものである。小学校の生徒が折々通る。中野まで何町と聞けば1里(約4km)はあると云う。そこで勇み立ってまた歩き出した。ドングリの実を拾う心は幼児の如く。日傘をさしたい位であると母上は申された。握っている手はお互いに汗である。富士の望み得る小丘へ出た。秀麗なる姿である。銀の頭、白の帯、連なる青巒、近くの農家、記念撮影するには絶好の景色である。写真機を持って行かなかったのが惜しく思われた。母上に説明して上げると宛も見えるものの如く喜ばれて、秋晴れの今日の散歩は感謝された。

二人のお腹はそろそろグウグウ言いだしてきた。行き交う人も稀な田舎道を何町も何町も西北へ西北へと進んだ。中野のお祖師様(妙法寺)へ、母上は15年前に散歩に来られたことがあったが、それを思い出されて、お祖師様へ行こうと申され、行くことにした。道程を聞きつつ行く。やつとのことでお寺へ辿りついた。空腹の感じは何とも云えない。遠足して空腹になる感じはかなり久しぶりで感じた。さて、何処か腰かけるに適したところはないかと境内を見回すところ、これとて見当るところがない。さりとて、もはや歩く気力はない。そこでまずまずここで我慢しようと腰を卸したところは栗と松の老木に囲まれた木蔭の石の上である。そこに腰かけてお弁当を開くことにした。藪蚊が時々襲撃する。しかし、実に実に美味しかった。渴いた咽喉を潤す牛乳の一杯、何とも云えない。お弁当の三分の二を母上と仲よく戴いた。アケガラスも半分ずつ、林檎も半分ずつ、食を終えたのは1時少し過ぎであった。

それより中野駅まで約半里(約2km)。姉上のお家も手にとる様に見えるところに出るところへ来た。しかし、今日はお寄りすることは、姉さんに済まないが止めた。というのは、寄れば止められるに定っている。とめられれば、中野から井ノ頭へ行こうという二人のプランがオジャンになるからであった。

途中で栗を買った。お土産に。中野駅に着いたのは2時少し前、20分ほどの間があった。丁度よい休息が出来た。吉祥寺行に乗る。3時20分前に着いた。「栗めし」の暖簾があちこちにある。たぬきの人形が藁の棒の先にぶらさがっている。3時少し過ぎ、井ノ頭公園に入った。森の気と池の涼風。

「頭の心から氷で冷やされる様な気持がする」

と母上は申されて本当に喜ばれた。

「ああ、いい気持」

「いい気持ねえ、母様」

と二人はこの井ノ頭へ来たことを本当に喜んだ。今まで2里ほどの道を日の下で歩いた体

は、ぼかぼかしていたのであろうから、この氣に漬かった心地としては形容の致し方がないのである。池畔のベンチの上に腰かけて、暫し茫然、蕩然、嘆称措く能わずであった。残りのお弁当を開いて悉く戴いた。水に浮かんでいる鶯鳥にもやった。膝下に近よる犬にもやった。手下袋はお土産の栗だけとなった。この涼風を何と云おう。頭に切に感ぜられた母上のお喜びを見て、僕の喜びは更に更に大であった。嬉しきこととて、母上の喜びを得たるときに勝るはないのである。「希望」を読んで上げた。それからブラブラと歩いて、清水の湧出するところへ出た。口を雪^そいだ。池に沿うて西側へ出た。去年腰かけたベンチがあった。懐かしくて腰を卸さざるわけに行かなかった。池を横断している橋の上へ出た。池心に月影が映じていた。崩れんともしない穏やかさである。水鳥が折々鳴く。人影は稀である。井ノ頭公園の2時間は瞬時としか思われなかった。電車の時間にせきたてられて立ち去る。

井ノ頭公園は最初に来たのが僕の小学校の5年のとき、遠足で(学校の)。而もその後、腎臓炎をわずらったのであった。その外、思ひ出が母上にも僕にも少しあるところである。5時6分発車。丁度、Sunset、入日のときで、西天紅で燦としていた。窓外より吹き来る涼風に頭をさらして二人とも恍惚として睡境に入らざるを得なかった。何とも云えぬ心地よき眠気である。車中の40分も^{しゅつこつ}倏忽の中。市ヶ谷で下されたときは半月皎々と懸かる夜。

この世の最も美しきものは何であるか。それは月である。なぜと云う人があるならば、僕は答える。母上様の仰ぎ瞻る唯一のものなるが故に、と。母上は何も見得ざるお眼を有し給う。しかししかし、唯一の月をのみ見る眼を有し給う。その麗しき眼は他の万象を見るには余り潔くありすぎるのである。

母上よ、母上よ。かく云う私の衷心や涙の結晶にあらざることかは。然り！ 然り！これは感情でない。真理である。最崇高崇美のものは、一つなるものを仰ぐ人の心である。唯一なる月である。

6時10分、帰宅した。兄上、姉上、壽子さん、一斉に出て来られた。咽喉が乾いていたので夕餐の、茸のお露は実に実に美味しかった。入浴した。全身の疲れが心地よく出てきて、就寝はパラダイスへ行くの心地。感謝のお祈りを寝ながらにして捧げつついつしか熟睡してしまった。

生まれて初めて母上と共に散歩した。一日の清遊をなした。母上も子供と共にこんな散歩の(ピクニック)をされたことは、生まれて初めてであると申された。逝きし兄上となせしことなく、次兄となせしことなく、山本の姉となせしことなく、僕と今日初めてなし給う由。而もそれは御不自由な身となられての今日のことである。母上の奮闘の生涯は此の一事で明瞭である。一日を最も愉快に送ったとて今日の如きはないのであった。僕の務め、否、やりたいことは総て母上を喜ばせ奉らんことである。



○1923年10月20日 (土)

晴。起床6時半、珍しく早起きした。戸外を一寸散歩した。秋の朝の気持の好き、これが郊外の朝ならと思われた。冷水摩擦を一昨日からまた始めた。今日も好天気で飛び出したかった。本棚や六畳の間の整理で一寸忙しかった。炬燵の土台を築くのはいい運動だった。お昼は秋魚を焙りながら二匹戴いた。兄上と共に。昨日のお土産の栗金豆も美味しかった。青木の叔母様が来られた。3時に掛けて大学病院へ三弦様をお見舞いに行った。2時間ほどお話をした。痔の病気があったとは夢にも思わなかった。武田の叔母様がよくなれんことを祈る。

松村先生の病室には「面会謝絶」とあった。先生と僕との間は2間かそこらであろう。而も先生にお見舞の言葉のかけられぬ苦しさ、涙でなくて何であろう。先生の今度の災禍はどうしたものだろう。お気の毒で堪らない。しかし、先生は天命に安んじて居られることと信じて、若し神招き給うのなら潔くお別れしなければならぬ。

帰途、一寸雨が降った。しかし間もなく月が出た。7時帰宅。一寸入浴。兄上とお約束の肉鍋をやった。非常に美味しかった。また入浴した。母上に背中を流して戴いた。お上手である。随分、垢が出た。

一家の健全で主の御心に従って日々を送るより幸福なことではない。その外に欲を起こしては不幸の第一歩である。我等の望むところは一つである。

○1923年10月21日 (日)

晴。門出の時が来た。丁度1ヶ月経った。健康第一、健康第一と鞭撻して下さった神に深く感謝し奉るのである。我が病は、神の聖旨に反して行つた自分の欲から起つたものであること、疑いなきものである。この故に、感謝すること更に深いのである。御赦しは深き聖旨ありてより始めて自分に臨んだものである。

我慾を棄てしめ給え。食のことを忘れしめ給え。願わくは益々健康体となし給え。

自分の心にあらず、聖旨を知らしめ給いて導き給え。

御力を注ぎ給いて、主の道を確く歩ましめ給え。

一家4人はテーブルを囲んで健康のために祈る。母上と硬き握手をして出で立った。孝さんに、色々世話をかけたについて僕の心として少しの金を上げる。お昼と晩のお弁当を作ってもらった。共に美味しかった。12時25分の汽車で上野を発した。上野駅も惨たるものである。節制、緩を起こさぬ様に、小さい誠の母のお言を大切に遵まもらう。久しぶりで桐寮に帰った。

○1923年10月22日 (月)

晴、十三夜。亡兄の御命日、謹みて送る。偽の生活より信仰の生活へ。未だ汝には偽なるところありき。もつともつと信仰の生活へ。もつともつと真剣に、落ち着いて、腹を据



えて。有難し。深く感謝す。

○1923年10月23日 (火)

快晴。久しぶりで登校した。多くの友達から尋ねられて返答に飽きる位であったが、冷淡ならざる彼等の言葉は温かく響いた。病氣！ どうしてと聞かれたときに僕の胸は痛いのである。原因は己れにあり、己れの欲の犯せしにありと深く知る自分にとってこれほど辛いことはない。注意しろよ！ と云われて返ってありがたくその忠言を受けるのである。自転車で靴屋へ行った。入浴した。何とも云えない気分で縁側に腰かけていたとき、団々たる月が眼に入った。実に素敵だった。月夜である。散歩に出掛けた。就寝10時半。聖旨を求めて、罪を告白して。

○1923年10月24日 (水)

雨後晴、満月。秋の雨がもの淋しく降っていた。寒い位であった。学校の課程、あまりの長休みに大分遅れて、忙しいこと夥しい。おびただしかし、恐れることも要らない。あわてる必要もない。毎日毎日出来るだけの仕事を無理のない様にやって行けばそれでよいのである。その日暮らしが大切、余計な心労は無用。肝を据えよう。満月皎々たる夜、外気は凜乎として膚に寒い。呑気なお月見は出来ない。しまった顔で仰ぎ瞻る。み満月にオリオン、時に10時半、寂寞たる夜。せきばく

一葉の書信を母上にお贈りする。切なるお祈りを、自分のため、母のため。

○1923年10月25日 (木)

晴。冬の如に寒くなった。よう冷水摩擦が大分辛い。しかし我慢して寒風にさらされつつやるのは愉快である。身体にエネルギーが不足して元気がない。先ず胃腸を、である。夕方、キャッチボールをやる。入浴した。晩、四郎ちゃん、宣ちゃんと、あり合わせのお餅で果汁粉を作った。月夜は相変わらずいい。マントをかぶってお月見の散歩をした。

○1923年10月26日 (金)

雨。随分寒くなった。例年通りの僕なら、これ位の寒さは何でもないのであるが、こう痩せていては、寒冷を感じることが一層甚だしい。帰寮後、一休息、入浴して悠然と、茫然としているとやがて夕飯になる。独逸語と数学を先ずやった。数学「微分」は難しいこと夥しい。12時までかかった。

宗教書を読めなかったのは残念であった。この頃の余裕のないのは打撃である。しかし、1ヶ月も休校したのであるから己むを得ない。神の聖旨はどこまでも聖旨である。罪の告白はどこまでも告白である。そして、貴き其の日其の日を送って行こう。大事なことはこ



れである。徒に大を望み、あせるの要はない。もつと深く己れについて考える必要が生じて来た。

forme, "Yen's body"

〔グノーティ・セアウトン、汝自身を知れ〕

for my health, "Mens sana in corpora sano."

〔健全な精神は健全な身体の中に〕

for my study, Strüze vorwärts sich verzweifelt

〔必死で前へ突き進め！〕

曾子曰。士不可以不弘毅。任重而道遠。

〔曾子曰く、士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し〕

悪衣服菲飯食而致孝乎母兄。曾子実践窮行之人也。

これ等の字句を揚げた心持は、本心に立ち帰って己れの為すべきを為せと自ら戒めるため、励ますためである。標語でもない。辰雄の歩む道は在る。それは毎日毎日の御声のもとにある。そこに戴くところの絶えざる勇氣と忍耐と努力とを以て勇往邁進せんとするのである。

○1923年10月27日 (土)

晴。

神よ、この罪に贖われし身を潔め給え。

神よ、わが口はきたなし、清め給え。

神よ、我が心は食につきたり、忘れしめ給え。

神よ、我をして節制あるものとなさしめ給え。

神よ、我を清めんがためには如何ほども咎を加え給え。

神よ、ああ、我が罪は大にして測るべからず。

神よ、ああ、この罪を如何にせば、拭われん。

神よ、如何に悔ゆるとも、如何に涙を流すとも、我に我が罪を贖う力はあらず。

神よ、ただ十字架にすがらんのみなり我は。十字架は我がためなりき。ああ感謝なるかな。

悩みと憂いに沈み果てなんこの身は、十字架によりてのみ救いを得るなり。

神よ、真剣なる基督者とならしめよ。

神よ、この身体に神の御力を与え給え。

神よ、忍びて、忍びて待たん。

神よ、確く、確く歩まん。

神よ、総ては御声のままに。

更に神よ、母上に、兄上に、姉上に臨み給え。

藤井先生、高島様のまま様、天の兄上様よ、母上様よ、兄上様よ、願わくは、この罪深き身のために厚きお祈禱を捧げ給え。

ルーテルよ、バンヤンよ、リヴィングストーンよ、ゴルドンよ、リンカーンよ、グラッ



ドストーンよ、クロムエルよ、内村先生よ、願わくは、あわれなるこの身に御力の注がれたため、祈り給え。

○1923年10月28日 (日)

晴。午前、書翰5枚を書いた。夜には久しく御無沙汰申し上げて居た高島のまま様に認めた。心ははれる様な気がした。昨晩は、武田の叔母様の御病氣非常の軽快に趣かれ、元氣になられた夢を見た。

午後には学校へ遊びに行つて見た。野球の仕合があつたが水高は大敗であつた。柔道の大会が大講堂で催された。七中学校の優勝戦そうはがあつた。水中の優勝に帰した。フットボールのいいコーチャーが来て猛練をして居た。

本屋で欲しい欲しいと思つていた本を見つけた。早速、天の兄からの贈物として買った。
“The Poetical Works of John Milton” [ジョン・ミルトンの詩的作品]である。良友が一人増えた。僕の側に居て励まし、導きなぐさめてくれることであらう。嬉しくてたまらない。

○1923年10月29日 (月)

久しぶりで兄上の(天に在ます)夢を見た。僕の力である。星である。母上様に衷心を披瀝した手紙を差し上げた。偽りより信へ、物より霊へ、地より天へ、人より神へ。これが僕の望む道である。今晩は珍しく桐寮に独り、寂けきこと限りなし。母上と9時のお祈りを丁度此れからする。余計な心配や氣遣いは虚弱なるこの身体に対しても大変な罪である。神様への信頼に全身をなげだして、安んじてあるべきである。宏毅もここに初めて真の意を生ずる。

「道を歩いて偉大な体軀の兵隊さんを見ると僕もあんな身体が欲しいとつくづく思う。その時あの身体は何で出来たかと一歩進んで考えて見ると、お菓子なんか欲しがっていは到底だめと思い、彼れ知らざる兵隊さんの前に己れのつまらなさのために跪きたくなる位である。その次の瞬間には、我れもまたと握り拳をして己れの臍を固め、神に祈り奉り感謝するのである」

このことを母上への御手紙にも申し上げた。満天の星、冴え渡った秋の夜である。

○1923年10月30日 (火)

晴。学校のことが忙しくて余裕のないのは聊か悲観であると言いたいが、已むを得ないことである。1ヶ月の欠席の産んだことである。しかし眼を転ぜよ。こんなことは物の数にもならぬ小さいこと。大きなものが臨んでいる。それを有難く受けよ。四郎君、宣ちゃん、明日の赤城登山の準備に忙しい。9時半、彼等と共に寝た。



○1923年10月31日 (水)

晴。天長節祝日。5時、彼等の出掛ける物音で目が覚めた。それからうとうとして6時半起床した。かなりよい天気である。好い登山が出来るだろうと羨ましかった。

10時登校。天長節祝日の故、講堂で式があった。頗る簡単、式のための式の様である。お菓子も出なかった。富山君の処へ行つて宗教談を少し交えて嬉しかった。水戸に談るものとは彼一人である。宗教心なき学生等の多きはどうか。これが皆日本を負つて立つ人間の集まりかと思うと将来の日本も知れたものの様である。

いよいよ、10月も去る。真剣なる月、11月が来る。僕にとつて最も大切な秋が来た。内なる心に、外なる身体に、また学業に。神よ、願わくは僕をして聖旨のもとに確しつかり歩ましめ給え。願わくは完全なる信頼を聖手にゆだねしめ給え。一日一日真剣に是によりて送らしめ給え。我が貴きエス様の御名によりて切なるこの願いを聞こし召し給え。アーメン。
31日11時、就寝前。

